

生成系 AI を補助的に活用した添削と添削文との比較による児童の推敲能力の向上

福島耕平（北海道教育大学 教職大学院札幌校 准教授）

【研究背景と目的】

2023 年度に実施された全国学力・学習状況調査（小学 6 年国語）の結果によれば、「書くこと」の平均正答率は 26.8%にとどまり、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」に比べて顕著に低い数値を示した。こうした結果は、児童にとって文章の構成や表現を考える活動、特に推敲を含む文章作成プロセスが十分に育まれていない可能性を示唆している。

しかし、文章指導において教員がすべての児童に対して丁寧な添削と個別フィードバックを行うことは、時間的・労力的に大きな負担を伴い、現場での継続的な実施は困難である。

そこで本研究では、生成 AI の活用によって教員の負担を軽減しつつ、児童の推敲力の育成を支援することを目的とし、実践的な授業研究を行った。具体的には、児童が自らの作文と生成 AI による修正文を比較し、アドバイスを讀んだうえで「気づき」を記述する活動が、推敲能力の向上にどのような効果をもたらすかを明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

本研究では、OpenAI 社の ChatGPT-4 の GPTs 機能を使用し、小学校高学年の学習指導要領に準拠したプロンプトと学習データを元に、国語科の作文指導に特化した独自 AI モデルを構築した。

実践は、三重県内の小規模小学校に在籍する小学 5 年生 11 名を対象に実施し、国語科「意見文」4 単元を通じて展開した。児童の作文に対し、生成 AI が修正文および具体的なアドバイスを提示し、これらを LMS「Moodle」のデータベースモジュール上に表示した。

児童は、自分の原稿・AI による修正文・アドバイスを比較・閲覧したうえで、「気づき」として得られたことを記述した。推敲力の変容を確認するため、プレ・ポスト課題として絵画を題材とした記述活動を設定し、「相手意識」「文章構成」「校閲」の 3 観点についてルーブリックを作成し、3 段階評価を行った。

【結果と考察】

4 名の評価者による作文評価の一致度は ICC(2, 4)=0.84 と高い信頼性を示した。分析の結果、「文章構成」および「校閲」においてプレ・ポスト間で有意な差が見られ、ポストの得点が上昇していた。また、質問紙調査では「校閲」に関する自己評価が有意に向上し、提出前に文章を見直す回数も増加していた。これらの結果から、児童の見直しに関する意識の高まりと行動の変化が確認された。

さらに、児童の記述した「気づき」には、2～4 項目にわたるアドバイス内容への言及が見られ、省察的な理解と受け止めが行われていた。単元間で記述されたアドバイス項目数の差異を反復測定分散分析により検討したが、有意な差は確認されなかった。この結果は、各単元において提示されたアドバイスが一定の範囲に分布しており、児童が一貫して多様な視点に着目していた可能性を示している。

中でも、児童が頻繁に言及していたのは「段落意識」に関するアドバイスであり、実際の作文でも段落構成に変化が見られた。また、生成 AI のアドバイスに対して肯定的に受け止める児童が多かった一方で、一部の児童はその内容を批判的に吟味しており、一方的な受容ではなく、吟味しながらアドバイスを活用しようとする姿勢が芽生えていた点も注目される。

なお、本実践では、生成 AI の出力を必ず教員が確認し、内容の適切性や児童の学力との整合性を判断した上で提示している。生成 AI によるフィードバックは児童の意図や能力と必ずしも一致するわけではないが、教員の専門的判断による補充を通じて、教育的に有効なフィードバックとして活用できる可能性が示唆された。

また、Moodle の活用により、児童が自分の作文・修正文・アドバイス・気づき記述を一画面で操作・参照できる環境が整えられ、推敲活動が日常化される足がかりとなった。

【まとめ】

本研究により、生成 AI を活用した修正文とアドバイスの提示、ならびに「気づき」の記述という間接的な推敲支援活動が、児童の「文章構成力」や「校閲力」の向上に一定の効果をもたらす可能性が示された。また、こうした活動は児童の表現に対する内省的な姿勢や見直し意識の育成にもつながることが示唆された。加えて、生成 AI の活用は教員の添削負担を軽減しつつ、児童一人ひとりに応じた継続的な指導の機会を提供する手段となり得る。ただし、児童の実態や意図と一致しない AI 出力もあるため、教員による確認と補足的指導は不可欠である。

【共同研究者 勝井まどか（鈴鹿市立合川小学校）・松野秀治（津市立誠之小学校）・國嶋朝生（秩父別町立秩父別小学校）】